

国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「いき」^(注)という美意識の登場が革命的だった理由は三つある。第一に「俗」^Aを肯定的に捉えていること。それどころか「俗」は「雅」を包み込むものとして、むしろ「雅」^aを存立させるベースとみなされている。第二に表と裏、形式と実質などの二重構造をもつこと。しかも想像された裏側が表面の現実にとされたこと。第三に「いき」^Bの成立には他人の目が必要であること。これは九鬼周造の言う「二元性」にあたる。以下これについても少し詳しく述べよう。

第一の雅俗の逆転について。もともと「雅」は権力に対立する文化的パワーであった。権力の源泉が政治・軍事・経済であったとすれば、「雅」の源泉は教養の蓄積や感性の錬磨^bである。そのような「雅」の力をもつとも発揮されたのは遊び、とりわけ人々が集う遊宴の場であった。だが文化的修練は有閑階級でなければできないし、その成果をセイダイ^アに発揮するには金がかかるから、古代では「雅」はキユウテイ文化^イの特性とされ、支配階級たる貴族だけのものではなかった。中世になると武士が階級上昇を果たして、「雅」は公家と武家のものとなった。しかし江戸時代には町人があらたなフユウ階級^ウとして登場し、遊芸の師について公家や武士同様の教養を身につけることができた。すなわち和歌を詠み、茶会を催し、謡曲を謡い、楽器を奏し、まるでかつての貴族のように遊ぶことができた。そして遊廓^ウでは、大名以上にもてることさえできた。「雅」は町人の手の届くところまで降りてきたのである。しかも「風流」が精神の問題とされたとき、貧しい町人さえ花見や雪見などの「I」な行為をすれば「雅人」になることができた。

ここまでくると、もはや「雅」は特権的なものではなくなる。そしてついに「雅」の精神を内に保ちながら、「俗」の世界で生きることを「いき」として評価する価値観が登場したのである。外見は「俗」だが内面は「雅」。これは町人にしかできないことだった。なぜなら、格式に縛られた公家や武士にとって「俗」に落ちないことは生活の規範であり、それを「くずす」ことは許されなかったからだ（被髪白衣^ニが死罪の理由にさえなった）。彼らが遊びの場で「いき」であることはできなかったけれども、それはあえて「俗」の模倣をすることだから、望ましいものとはされなかった。もし武家の妻や娘が「婀娜^ニなあねさん」などと呼ばれたら、それはほめ言葉にはならないのだ。「いき」はただ、もともと「俗」である町人にとって選択可能な生き方だったのである。じつさい「いき」を誇る町人は、「雅」の形式を固守する武士を「野暮^ニ」と見下したのである。

第二に表は「俗」で裏は「雅」といった二重構造について。それは一面の霧の向こうに隠された紅葉（鴨長明^ニ）とか、雲に覆われた月（兼好^ニ）とか、浜辺の侘び住まいに対比される記憶の中の「花紅葉」（定家^ニ）とか、待ちかねた春をシサする「雪間の草」（家隆^ニ）などの伝統を踏まえている。人は隠れたものにこそ強い関心を向け、想像の中の光景は実際以上に美化される傾向があ

る。そこで美しいものを「隠す」という戦略が生まれる。長明のいう「幽玄」である。これは江戸時代になると、世間で評価の低いものをわざと表に見せ、裏側に価値あるものをほめかすという手法となる。「表は木綿で裏は絹」というやり方である。さらにこれは「やつす」「くずす」「外す」などの方法を生んだ。見る側にはただ目に見えるものの美醜を判断する美意識だけでなく、見えない裏を思いやる想像力が必要となった。しかも、誰にも見える表よりも想像された裏こそ本質があるとされた。この裏側の美を読み取ることは、長明が既に指摘したように、子供にはできないし、^オドンカンな者にもできない。優美や華麗は誰の目にもわかるけれども、「いき」は感性を磨いた人にしかわからないのである。

第三に他者の目への依存について。華美とか上品などは、物それ自体、人それ自体の特性である。けれどもそれ自体「いき」な物や人があるわけではない。ある物を身につけることが、ある人の振る舞いが、他者の目に「いき」と見えるだけである。つまり他人の目の中でのみ、人は「いき」な男ないし女という評価を得ることができる。九鬼周造のいう「二元性」である。遊廓や花柳界に発した「いき」は、当初異性を惹きつける力への評価だった。「いき」の語は、媚態が成功して異性の心を動かしたこと(「好いた」と言われること)を意味した。けれど露骨な誘惑は「意気張り」に欠けるから「いき」とは呼ばれない。「媚態」を隠しつつ、なお誘惑の力を持つとき、はじめて「いき」と呼ばれたのである。そこには露骨な「Ⅱ」を避けたいという羞恥心が働いている。そしてこれは「恥」を避けようとする日本の文化と結びつく。「いき」の意味は拡大し、美意識に適用される。自分の美意識が高いとか他人を思いやる心があるなどの美德を誇示していると見えるのは恥ずかしい。だから隠さねばならない。そして他者の眼が隠されたものに気がついて、裏にあったものを評価するのみならず、それを隠したこと自体を「いき」と評価してくれるのを待つのだ。自分にできることは、「いき」になることではない。「誰かが『いき』を見いだしてくれそうな二重構造をもった振る舞い」をすることである。

これらを^カシュウヤクした事例として守貞の「当世の美女」を見よう。洗い髪は鬢が無造作で顔に化粧のないことを示している。格子縞の着物に黒の半衿は庶民のふだん着であることを示している。ただ衿の内側に襦袢の模様が少し見える。ここに艶っぽさが隠されていることがわかる。問題は縞模様である。九鬼周造は縞を「いき」であるとしたけれども、すべての縞が「いき」なわけではない。縞の幅と色合いによって、その印象がまったく違うからだ。シブい色で縞目が細かいものは地味だが上品にできる。強い色や太い縞だと丹前縞のように派手だが下品になりやすい。その中間に地味でも派手でもなく、上品でも下品でもないもの、つまり「出ず入らず」がある。「当世の美女」の縞は、黒白の素描なので色がわからないが、おそらく絶妙な「出ず入らず」なのであろう。その気になれば派手にも上品にもできるのに、あえて抑制しているのがわかる。それが「いきなあねさん」というものだった。

「雅」をあらわす日本語の「みやび」は当初漢字で「風流」と表記された。そして長く「風流」

は日本の生活美学における中心的な言葉として採用された。「風流」の意味は中国でも多様だが、日本ではまず社交上の美学として登場した。とりわけ男女の関係において、優雅に振る舞うことである。たとえば遊宴の場で歌を詠み、恋愛のエンギをするなど。やがて貴族社会において生活のあらゆる場面で優雅であることを期待されると、恋愛だけでなく、花見などのイベントでも古典を引用し、機知を競い、後世に残る風雅なイツワを作ることを目指した。また「風流」の意味が日本で変質して豪奢であることを意味するようになると、中世には「婆娑羅」が「風流」の形態とされた。さらに中国が「風流」に仙人や隠者にみられる自然愛好という意味をこめたことから、日本でも茶の湯などで隠者的風流が流行した。江戸時代にはこの二つの意味、すなわち遊びとしての男女の社交を優雅にこなせる風流と、好色を排し自然に遊ぶ風流とが並立する。前者は浮世の風流であり、後者は隠者の風流である。浮世の生活の美学は遊びとしての疑似恋愛だけでなく、日常の髪型、着物、持ち物を含め、あらゆる方面で洗練を求めた。そして社交面で「Ⅲ」であることと、生活の細部で美麗であることの追求が極点に達したとき、江戸の町人の中でこれを隠すという逆転がおこる。「いき」の美学の発明である。これが起こったのは、欲望の露出を「恥」とする「張り」の文化伝統と、「雅」の真似はできても本質的に「雅」であることを許されない町人という身分制度のためである（たとえば奢侈禁止令によって町人は高価な衣装を身につけることができなかった）。江戸の町人は、日本で千年以上にわたって生活美学の原理であった「雅・俗」に代えて、「いき・野暮」という新しい原理を提案したのである。

古代の「雅」がもつばら上流階級のものであったように、「いき」は都市生活者のものであった。「田舎者」という言葉はほとんど「野暮」とドウギだった。言い換えれば、古代における下層民も江戸時代の田舎者も無教養の野生人とみなされており、貴族や都市住民こそが美学的な生活の訓練を受けた文明人であるともなされたのである。もちろん実際には地方にも風流娘子はおり、江戸にも野暮な者はいる。けれども「野暮と化け物は箱根から先」という言葉は江戸っ子の誇りをよく示しているだろう。それは京都の伝統とは異なる価値規範を自ら打ち立てたという宣言であったのだから。

（尼ヶ崎 崎彬『いきと風流——日本人の生き方と生活の美学』による）

（注）「いき」という美意識の登場——筆者は、江戸時代後期（一九世紀頃）に「現代の私たちが知っている『いき』の美学」が完成したとしている。

九鬼周造——哲学者（一八八八—一九四二）。

「被髪白衣」——「被髪」は、頭や顔に髪がかぶさる様子をいい、ざんばら髪などの状態のこと。「白衣」は、はかまを着けない着流し姿のこと。

婀娜な——色っぽい。

守貞——喜多川守貞（一八一〇—？）。江戸時代後期の風俗史家。

問1 二重傍線部ア～コのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア	セイダイ	1
イ	キュウテイ	2
ウ	フユウ	3
エ	シサ	4
オ	ドンカン	5
カ	シュウヤク	6
キ	シブイ	7
ク	エンギ	8
ケ	イツワ	9
コ	ドウギ	10

問2 傍線部a～dの漢字の読みをひらがなで記せ。

a	存立	11
b	錬磨	12
c	有閑	13
d	野暮	14

問3 空欄Ⅰ～Ⅲに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

- ① 豪勢 ② 好色 ③ 風雅 ④ 酔狂 ⑤ 通

Ⅰ 15 Ⅱ 16 Ⅲ 17

問4 傍線部A「『俗』を肯定的に捉えている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 18

① 「いき」という美意識は、「雅」という権力に対抗するものとして、近世の町人によってうみだされ、「俗」の世界に生きることを評価したということ。

② 「雅」が貧しい町人にも手の届くものとなった時代において、格式に縛られていた公家や武士に対抗し、町人たちがあえて「俗」の模倣をしようとしたということ。

③ 貴族や武家のためだけに存在していた「雅」は特権的であり続けたため、町人だけにしかできない生き方を「いき」として肯定しようとしたということ。

④ 「雅」の特権性が失われ、町人も雅人になれる時代になったことで、「雅」の世界に生きながら「俗」の精神を持つ生き方が「いき」として可能になったということ。

⑤ 「いき」という美意識においては、内面が「雅」で外見が「俗」であるなどの生き方を高く評価し、「雅」を包み込むものとして「俗」を捉えていたということ。

問5 傍線部B「『いき』の成立には他人の目が必要である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 19

① 「いき」は到達不可能な境地であり、したがって「いき」な人や物自体が現実には存在できないのではないので、他人の目にいかに「いき」に見えるかということを求めることでは存在できないということ。

② 「いき」は、他人の評価を気にかけて露骨さや美德の誇示を恥とする日本文化と結びついているため、あるものを隠しているという行為を他人が認めてくれることが必要不可欠になっているということ。

③ 「いき」は、華やかさや上品さと同じく、その人自身に備わった美德ではないため、露骨さを隠すという、美意識にのっとった行為をしたということ自体を、他人に評価してもらう必要があるということ。

④ 「いき」は、人や物自体の特性ではなく、あくまでも他人の評価としてあるので、恥を避けようとして隠されたものの素晴らしさとともに、隠した行為自体を他者に認めてもらう必要があるということ。

⑤ 「いき」は、元来異性を惹きつける力への評価としてあつたが、恥を避けるという日本文化の影響によって、媚態を排除し、その行為自体を他人が評価してくれるのを待つようになったということ。

問6 傍線部C「長く『風流』は日本の生活美学における中心的な言葉として採用された」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 20

- ① 貴族社会において優雅な振る舞いを意味した風流は、中世になって中国の影響を受けて婆娑羅のような豪華なものを指すようになり、さらに隠者の風流が加わったということ。
- ② 意味は様々に変化しつつも、社交上の美学として重んじられてきた風流は、江戸期になって新たな意味が生まれ、それまでの意味との逆転が生じたということ。
- ③ 貴族社会における社交上の美学として登場した風流は、近世において浮世の風流と隠者の風流が並立するようになり、生活のあらゆる面でその洗練が求められたということ。
- ④ 風流は、中世までは社交上の美学であり、男女間において風雅を競うものとしてのみ存在していたが、その後次第に意味が拡大し、近世にはその追求が極点に達したということ。
- ⑤ 風流には多様な意味が含まれるものの、社交上の優雅な振る舞いを指すという点で時代を超えて共通していたが、江戸時代になって二つの対立する意味に分裂したということ。

問7 「雅」と「いき」の共通点や相違点の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 21

- ① 「雅」も「いき」もある特定の人間だけに許されたものであり、他の人間がそれを身につけて実践することは不可能だった。
- ② 「雅」は教養の蓄積や感性の錬磨があつてはじめて成り立つものであるが、「いき」であるためにも感性の錬磨は必要だった。
- ③ 「雅」は誰の目にも明らかであるが、「いき」は裏を想像することが不可欠であり、それは町人にしかなしえなかった。
- ④ 「雅」は誰の目にも明らかであるため、誇示することは慎むべきだが、「いき」は隠されているためアピールする必要があつた。
- ⑤ 「雅」も「いき」も日本文化の伝統と深いところで結びついており、ともに二重性や戦略的な美意識を有している。

問8 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

① 江戸時代は、生活のあらゆる面において美の洗練が追求された時代だが、当時は身分制度が厳然として存在しており、町人は浮世の風流を禁じられたので、欲望の露出を恥とする新しい意識が芽生えた。

② 「いき」は価値あるものを隠し、さらに隠していることを他人に発見されやすいように振る舞うという、ある意味では慎重深さを誇示する戦略でもあるため、「いき」は常に「野暮」に墮す危険性をはらんでいた。

③ 「いき」という美意識が登場したということは革命的であったが、それは京都を中心として形成されてきた日本の文化伝統とは異なる生活美学の原理を、江戸の町人が提案し、確立させたものであった。

④ 日本の文化伝統では、「雲に覆われた月」のように、隠されたものに関心を向け、それを実際以上に美化するが、「いき」はその伝統をうまく利用し、隠したものがあることによってさらに表が引き立つようにした。

⑤ 守貞の「当世の美女」は、地味と派手の間、いいかえれば上品と下品の間を狙うことによって、絶妙の「出ず入らず」を実現し、あえて女性の個性を消すことで、多くの人に受け入れられる作品となった。

第2問

次の文章は、『百人一首一夕話』の一節で、「藤原実方朝臣」について書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを^A

後拾遺集恋一に女に始めていひ遣はしけるとあり。歌の心はかやうに思うて居るといふ事さへ、えいはぬによりてといふ言葉を伊吹山といふ山の名にいひかけたるものにて、伊吹山は下野の名所なり。その山にさしも草といふ草が生ゆるなり。それは今いふもぐさの事なり。そのさしも草といふ名に、さしも知らじなと重ねていひかけたるものなり。さしものしの字は助字にて、先の人かさうとも知るまじ、このやうに胸の燃ゆる程にこがれて居る我が思ひをといふ心なり。

実方朝臣、叔父済時の養子となりて一条帝に仕へ歌詠みの名高かりしが、ある年の春、殿上のをのこども花見んとて東山の辺へ行かれけるに、にはかに心なき雨の降り出でければ人々騒ぎ合へるに、実方の中将木の下に立ちよりて、

桜狩雨は降り来ぬ同じくは濡るとも花の蔭に宿らん

と詠みて、梢洩り来る雨にさながら濡れて装束も絞るばかりになりたる由を聞き伝へて、この事興ある事に人々思ひ合はれけるに、またの日、齋信大納言、「かかる面白き事の侍りし」と主上へ奏聞せられけるに、その折しも行成卿お前におはしけるが、「歌はおもしろし、実方のふるまひこそをこがましけれ」といはれけり。この言葉を実方洩り聞きて、それより行成卿に深く恨みを含まれけるが、その後、殿上においてふと行成卿と争ひ論ぜらるる事ありしに、先の憤りをや心に含まれけん、行成卿の冠を笏にて打ち落とし、小庭に投げ捨てられたり。この時行成卿は少しも怒れる気色なくて、殿守司を召して、「冠取りて参れ」とて、冠して守り刀より笏抜き取りて鬢つくりひて居直り、「いかなる事にて候ふやらん、たちまちにかう程の乱冠に預かるべき事こそ心に覚え侍らね。その子細を承りて後の事にも侍らんものを」と、事麗しくいはれければ、実方は言葉しらけて逃げられけり。その折しも半部のかなたより主上始終を御覧ありて、「行成はいみじき者なり。かくまでおとなしき心あらん者とは思はざりけり」と賞美し給ひて、そのころ蔵人の官の空きたりけるに多くの人を越えて行成卿を蔵人になされ、実方は中将の官を召し上げられ、「歌枕見て参れ」とて陸奥に遣はされけるが、一旦の不礼を咎めさせ給へれど、もとより才ある人なりければ、憐れませ給ひ、奥州へ往かるる時、殿上へ召され御酒など賜はり、位を一階進めて遣はされし。この時、右近中将師宣といふ人、日頃実方と隔てなき友なりければ、実方泣く泣く暇乞ひして陸奥へ下られし後、かの国より師宣の許へおこされたる歌、

やすらはで思ひ立ちにし東路にありけるものを憚りの関

この歌の心は君の勅勘を蒙りて都に足をとめず思ひ立ちて奥州に下りしが、東路にもなほ世を憚るといふ憚りの関はありたるものを、さやうなる名のあらんとも思はず、都を憚りてとく立ち出でし事よといふ事なり。またこの別れに大納言公任も馬の下鞍といふものを遣はすとて、「都の

月を恋ひざらめやは」といふ歌を添へられたり。その返り事に実方の詠まれたる歌、
F
ことづてん都の方へ行く月の木の下暗く今ぞ惑ふと
木の下暗くといふ言葉に、下鞍といふ事を隠して詠めるなり。

(注) 筭——刀のさやの側面にさしてあるへら状のもの。

半蒔——板戸の一種。

歌枕——歌によく詠まれる名所。

問1 傍線部ア～ウの古語の読みを、現代仮名遣いのひらがなで記せ。

ア 朝臣 23

イ 蔵人 24

ウ 御酒 25

問2 波線部あゝおの語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ えいはぬによりて

26

- ① 少しばかり言ったのだけれど
- ② 決して言うつもりはないので
- ③ とても言うことができないので
- ④ すべてを歌に詠むのは難しいから
- ⑤ 今まで誰にも言ったことはないから

い さながら

27

- ① ひとりでに
- ② すぐに
- ③ しだいに
- ④ 残らず
- ⑤ やはり

う 事麗しく

28

- ① 親しそうに
- ② 端正に
- ③ とても穏やかに
- ④ 控え目に
- ⑤ 優しい口調で

え おとなしき

29

- ① 素直である
- ② 思慮分別がある
- ③ 風流である
- ④ 気丈である
- ⑤ 誠実である

お やすらはで

30

- ① 都みやこに留とどまらずに
- ② 都で職を失ったので
- ③ 都では心が落ち着かないので
- ④ 都を去るのは不安であるが
- ⑤ 都を去る決断ができずに

問3 二重傍線部 a・c・d・g・i の「れ」の中で、他と用法の異なるものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 31

- ① a ② c ③ d ④ g ⑤ i

問4 二重傍線部 b「侍り」・e「候ふ」・f「承り」・h「遣はさ」の敬語についての説明として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

b 32 e 33 f 34 h 35

- ① 丁寧語で、主上に対する敬意を表している。
② 丁寧語で、斎信に対する敬意を表している。
③ 丁寧語で、実方に対する敬意を表している。
④ 尊敬語で、主上に対する敬意を表している。
⑤ 謙讓語で、実方に対する敬意を表している。
⑥ 尊敬語で、行成に対する敬意を表している。
⑦ 謙讓語で、斎信に対する敬意を表している。

問5 傍線部 A について、次の問いに答えよ。

(1) 「かく」の指している内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 36

- ① あなたに伊吹山を見せたい
② あなたを恋している
③ あなたの手紙を待っている
④ 私の手紙を受け取ってほしい
⑤ 私を恋してほしい

(2) 「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」の歌に用いられている修辭法の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 37

- ① 「いぶきのさしも草」は、「さしも」の枕詞である。
② 「いぶき」は、「伊吹」と「言ふ」の掛詞である。
③ 「燃ゆる」は、「さしも草」の縁語である。
④ 「思ひ」の「ひ」は、「火」との掛詞である。
⑤ 「思ひ」の「ひ」(火)は、「さしも草」の縁語である。

問6 傍線部B「この事興ある事に人々思ひ合はれける」の「この事」の指している内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 38

① 満開に咲いている桜の花が雨によって散っていくのを実方が見て、残念だという思いを歌に詠んだこと。

② 直接雨に濡れるのではなく木陰に雨宿りしながら花を伝い落ちる滴に濡れたのを、実方が歌に詠んだこと。

③ 雨に濡れるのもいとうことなく桜の花を心ゆくまで観賞したことを、実方が趣深く歌に詠んだこと。

④ 雨によって散っていく哀れな桜の花びらに託して、世の無常を感じたことを実方が歌に詠んだこと。

⑤ 桜の木陰にいても降ってきた雨に濡れることに気づかなかつたのに、それを伏せて実方が歌を詠んだこと。

問7 傍線部C「をこがましけれ」は、どのようなことに対してこのように言ったのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 39

① 雨に濡れてまで花見をしたことを詠んだ歌を実方が自慢したこと。

② 実方が桜の花見にこだわるあまりに雨に濡れてしまったこと。

③ 実方が詠んだ花見の歌を趣があると人々がほめたこと。

④ 雨に濡れて花見するのは無粋であることに斎信が気づかなかつたこと。

⑤ 斎信が主上の前で実方の歌作りの経緯を興味深く話したこと。

問8 傍線部D「いみじき者なり」を具体的に説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 40

① いかにも風流人らしく振る舞った実方の真意を鋭く見破って、後のことは考えずに率直に意見を述べる、直情径行な者である。

② 実方が批判されたことを恨んで乱暴を働いたにもかかわらず、冷静に対応のできる道理をよくわきまえた、度量の大きい者である。

③ 斎信が実方の歌を十分に理解せずにはめたところ、その誤りを即座に指摘できるほどの、歌人としての才能に秀でた者である。

④ 実方がさげすまれた仕返しをするために乱行に及んだけれども、臆することなく立ち向かっていくほどの、正義感の強い者である。

⑤ 歌の出来栄えをほめたのに実方が勘違いして粗暴な振る舞いをしたが、温情をもって接することのできる、寛容さに富んだ者である。

問9 傍線部E「都の月を恋ひざらめやは」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 41

- ① 都の月を思い出す時には、ぜひとも私のことも思い出してください
- ② 都の月は何度も見ているから、恋い慕うこともないのだろうか
- ③ 都での不祥事はもちろん、都の月さえ思い出したくはないでしょう
- ④ 都を遠く離れても、都の月を懐かしく思い出してほしいものです
- ⑤ 都の月を恋い慕わないであろうか、いや、きっと恋い慕うだろう

問10 傍線部F「ことづてん都の方へ行く月の木の下暗く今ぞ惑ふと」は、どのような心情を詠んでいるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 42

- ① 都の方に傾いていく月を見ると、都を去っていく心が木陰のように暗くなって思い乱れている。
- ② 都の方を明るく照らしている月を見ると、どうして心が暗くなって乱れるのか、わけがわからない。
- ③ 都を落ちていく者の困惑や嘆きの心を、月が明るく照らして優しく慰めてくれるので感謝している。
- ④ 都を去って生きていく氣力を失っている暗い心を、都の方に傾いていく月に受け取ってもらいたい。
- ⑤ 「下鞍」は「下暗し」につながって心が暗闇に閉ざされてしまい、都を去っていく決心が鈍ってくる。

問11 本文で「実方」の言動はどのように描写されているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 43

- ① 歌人として名高かったので自信過剰となり、人との言い争いが絶えなかったために陸奥の国に左遷されたが、気にかけることなく急いで出発した。
- ② 行成との口論を主上にとがめられて陸奥の国への下向を命じられたが、都を去りたくないで、多くの歌人仲間に見送られた時に惜別の涙を流した。
- ③ 行成に無法な振る舞いをして理由を問い詰められたが、正当な言い訳ができないので、黙ったまま謝罪もしないで悠然として立ち去って行った。
- ④ 歌は巧みに詠むが執着心や思慮が浅い所もあり、行成への暴行がきっかけとなって陸奥の国への下向を命じられ、泣く泣く出発して行った。
- ⑤ 雨に濡れながら花見をしたことを歌に詠んで多くの人々からほめられたが、行成からは歌を酷評されたので、つい粗暴な行動をとってしまった。

(国語の問題は終わり)